

第9回東アジア唐芋友好ワークショップの概要

NPO 唐芋ワールドセンター 理事

こばやし やすひろ
小林 泰宏

はじめに

東アジア唐芋友好協会の第9回ワークショップが2018年8月25、26日の両日、中国・天津市で開催された。このワークショップは日本、韓国、中国のサツマイモ生産農家をはじめ、加工や販売、研究にかかわる人たちを主要メンバーとして2010年2月にスタートしたものである。日本を振り出しに韓国、中国と輪番で催されており、昨年8月の韓国・海南での第8回大会に続いて、主催団体のひとつである「NPO唐芋ワールドセンター（郷原茂樹理事長）」の理事として今回のワークショップに参加したので、その概要を報告させていただく。



天津市位置図

〔Ⅰ〕参加者

今回の日本からの参加者は21人にのぼっ

た。主要メンバーは鹿児島・熊本からの9人、沖縄・読谷村からの6人などである。来年の読谷村での開催が第10回記念の集いとなるため、昨年は田島利夫副村長はじめ担当職員ら5人が参加、今回は石嶺傳實村長を筆頭に読谷村観光協会の知花昌彦副会長らも出席し、沖縄での初の開催に向けての意欲を示すものとなった。

韓国からは29人が参加した。開催前日の昼間に空路北京空港経由で天津入りする予定だったが、台風20号が朝鮮半島を直撃して北上したため飛行機便が乱れ、天津のホテルへの到着はすでに日付が替わってから、という思いがけない事態に見舞われた。

加えて地元中国からは200人余が参加した。主催国を代表する劉慶昌・中国農業大学農学院教授は開会宣言で「参加者は260人に達し、予想以上の盛会となったことをうれしく思います」と述べた。

〔Ⅱ〕開会

会場とされたのは、宿泊先と同じ天津市北郊のホテルの大ホールで、まず地区政府の局長が「河北省をはじめあらゆる地域に大きな意味をもつ会合であり、サツマイモ関連の6次産業化に向けて知恵を出し合い、



日中韓の参加者代表

農業のさらなる発展を実現していただきたい」と述べた。行政責任者が歓迎の挨拶の中で、「6次産業化」という言葉を用いて期待を語ったことは、10年近くにわたって続けてきたワークショップの意義を的確に示すものであった。

続いて登壇した東アジア唐芋友好協会会長の郷原茂樹氏は、歓迎の辞に応えて次のように決意を語った。

「振り返ると、私たちの会合は唐芋畑の中から生まれ、加工工場や販売店舗を見学し合うなどして、唐芋による6次産業を構築する運動に発展してきました。唐芋で豊かなふるさとを作ろうという私たちの思い

は、中国、韓国、日本という国境を越え、言葉や歴史の違いを越えて、心と心がつながる友好と平和の素朴な運動へと昇華してきました。今後、地球が食糧不足に苦しむなどの事態に陥った時、私たちの助け合い、支え合う関係はもっと大きな意味を持つはずです。これからもみんなで力を合わせて頑張っていきましょう」

東アジア唐芋友好協会の李貞玉・韓国会長は、水不足で悩んでいるサツマイモ農家の現状への懸念、日本で起きている豪雨災害に痛む思いなどを語ったうえで、「サツマイモの根が土の中で頑張っているのを見ると、私たちが子供たちのために立派に根を張っていくことの大切さを教えられる思いがします。互いに学びあうだけでなく、友情と信頼を深めることでさらなる発展の機会を築いていきましょう」と語りかけた。

引き続き、主催国の実務責任者として登壇した王立国氏が「北京天津河北省サツマイモ産業連合」なる組織の設立宣言を行った。中国ではこれまで、自国でのワークショップ開催、日本と韓国への参加者派



立ち見の参加者が出るほど盛況の会場風景

遣のいずれも、サツマイモ研究の代表とされる劉慶昌教授が中心となって担ってきたのが実態である。今回は、劉教授の協力のもとでサツマイモの生産加工一体型の企業（天津豊華裕隆農業発展株式会社）を率いる王氏が地元・天津での開催を引き受けたのだが、一方で今後のワークショップの運営組織について検討を行い、この日の設立宣言に至った。会場ホールの最前列に並ぶ行政当局者からも盛大な拍手が送られ、今後の唐芋ワークショップへの取り組みの進化をうかがわせる一幕となった。

〔Ⅲ〕 報告・討議

1 中国サツマイモ生産の現況及び問題点

河北省農林科学院 马 志民 氏

（1）中国サツマイモ産業界の現状

明の時代に伝来して以来400年余の栽培歴史を持つサツマイモは、各地に普及し「サツマイモは世代を救う」と言われる。栽培面積は、1961年の1085万 ha から減少して最近5年間は330万 ha で安定しており、総生産量は7千万トン前後である。品種もデンプン型、蒸し型、焼き型、葉っぱ型、青果型などの用途に沿って専門化、多様化が進み、発展を遂げている。

（2）健康な種苗の繁殖技術

ここ数年にわたるウイルス病の発生は、中国のサツマイモ産業に莫大な損失をもたらしており、優良種子の再生産技術がより重視されている。そのため、バイオ苗を育成する大規模生産会社がすでに10社ほど機能しつつある。それらの企業で重視されている繁殖技術について報告は具体的な説明に移り、「苗床準備」→「種芋を入れる」→「苗床の管理」→「芋畑の準備」→「植

え付け」→「中期管理」→「収穫」の7段階における重要な留意点、必要不可欠な対応措置などを地域特性も踏まえて明らかにした。

（3）主要栽培管理方法

機械類の使用は各地で進んでいるが、植え付けの際の栄養浸水機、植え付け機、注水機、その後の畝覆い機、蔓切機、そして収穫機などの使用に際しての注意点を説明。さらに主要病害虫について、とりわけコガネムシ、コメツキムシ、アリモドキゾウムシの識別と防除方法の重要性を強調し、除去に必要な薬剤についても言及した。

収穫後の貯蔵及び保管については、伝統的な井戸や穴蔵、半地下型、地上型の貯蔵庫などの例をあげ、それぞれの長所、課題を説明した。

（4）主要な問題点

以上の詳細なサツマイモ産業の現状分析に基づいて、提起された問題点は下記の5点である。

- ①サツマイモの優秀な品質の構造的性が不明確であること
- ②頻繁に発生する南方の病害虫が北方に広がる深刻さ
- ③頻繁なウイルス病の発生
- ④健康な種芋の繁殖が体系的ではない
- ⑤高効率かつ実用的な機械化の不足

2 鹿児島県大隅加工技術研究センターの紹介

同センター 下園 英俊 氏

同センターは「研究・開発」「施設開放」「企画・支援」の3つの機能を果たしている。

（1）研究・開発

対象とするのは以下の3分野である。

- ①「分析・評価技術」：青果物・加工食品の分析・評価
- ②「加工技術」：真空・高圧・加熱水蒸気などの技術を利用した加工食品の開発
- ③「貯蔵・流通技術」：加工・業務用野菜の安定供給を対象可能にする貯蔵技術の開発

（２）施設開放

「加工ライン実験施設」として根菜類洗浄機、多機能野菜裁断機、加圧真空釜、X線異物検出器などをパワーポイントで示し、その機能を説明した。「加工開発の実験施設」としては真空フライヤー、高温高圧殺菌機、加熱蒸気熱処理機、電解水生成装置など。

（３）企画・支援

生産者や加工事業者からの様々な相談への対応、あるいは個別の技術指導の際の微生物検査や成分分析の指導のために、ガスクロマトグラフ室や液体クロマトグラフ室、顕微鏡室や微生物実験室なども備えている。

それらを生かしながらの技術指導、人材育成のためのセミナー開催、ネットワークの構築やマーケティング技術の提案などを行っている。

（４）サツマイモの加工

続いて、サツマイモの加工に特化した開発例の説明を行った。開発目標として挙げたのは、次の５点である。

- 「サツマイモが主原料であること」
 - 「サツマイモの風味が豊かであること」
 - 「ノンフライ、油を使わない」
 - 「小麦粉を使わない（グルテンフリー）」
 - 「添加物・香料を使わない」
- 具体的に示したのは①サツマイモノンフ

ライ膨化スナック②丸ごとサツマイモ煎餅の２品目で、それぞれ材料の用意から焼き上げの仕方まで細かに紹介し、「どちらも鹿児島県の企業が商品化している」ことを明らかにした。

そして、今後の取り組みについて「高圧処理や加熱水蒸気を利用した高品質殺菌技術の確立など、サツマイモの風味・機能性を生かした加工品の開発に取り組んでいきたい」と結んだ。

３ 孔徳農協サツマイモ事業の現状及び発展方向

韓国 孔徳農協加工事業課長
具 烜雲 氏

孔徳農協は韓国中西部の全羅北道金堤（キムジェ）市に位置する。金堤市はサツマイモ栽培の最適地の一つとされ、2016年の人口は9万余、農業人口はその３割ほど。うちサツマイモ農家は1067戸で生産量は約8300トンである。

孔徳農協は1970年４月設立、組合員1350名、職員38名を抱える。2016年５月には農産物加工事業所を新設して食品加工・販売への取り組みを始め、自前のローカルフード店舗も構える。孔徳農協はこの時期になぜサツマイモの販売・加工事業への取り組みに踏み切ったのか。その説明は韓国における農業の現状、その中でのサツマイモの位置づけを象徴的に語るものであった。

まず、金堤市の農業が直面する「問題点」とは何か。

- ①FTA（自由貿易協定）の拡大により農産物の競争力の低下が著しい。
- ②耕作地の83％がコメ中心で、一次産業中心の構造下では農家の所得に限界がある。

③農家の組織化が不備であるため、生産品のブランド化や競争力強化で進まない。

では、どのような「対応の必要性」があるか。

①コメの代替作物としてサツマイモに注目する。

②金堤市には黄土の土質が多く、サツマイモ栽培の最適地である。

③高品質サツマイモの生産と加工、体験のためのクラスター団地の造成。

④専門性を備えた人材配置による契約栽培や法人化の進行、および多様な加工製品の開発とブランドの高級化。

(1) 加工事業の現況

2016年から発売しているのが「焼き干し芋」「焼芋ビンゴ」「ペースト」などで、2018年6月には「干し芋羊羹」も発売。加工事業売上高は2016年298百万ウォンから2018年6月末652百万ウォンへと急速な伸びを達成しつつある。これらの製品について、それぞれの生産工程の詳細から出荷の仕方、残された課題まで映像とともに詳しく語り、聴衆席の関心に正面から向き合う説明を続けた。

(2) ビジョンと目標

韓国では地域の農産物を使用する事業者が申請すれば、その成長可能性や既存製品との差別性、事業家マインドなどについて厳しい審査を行ったうえで「6次産業事業者認証」を政府が発行する制度が作られており、孔徳農協は2017年9月に認証を得たという。

それを踏まえて設定した目標は以下の3点である。

①サツマイモ産業1兆ウォン時代（全国）を牽引する生産・加工・流通体系の構築

②高品質サツマイモ生産のための無病苗の生産システム及びR&D体系の構築

③2017年の売り上げ70億ウォンを2020年には200億ウォンに

そして、こうした目標の先に「地平線サツマイモ・ヴァレーの造成」というビジョンを掲げる。そこにはローカルフードの直売店があり、サツマイモ菓子類の加工製造を体験できる施設や農家教育館、さらには産・学・研が協力しあう研究センターの設立も目指す、という。

4 サツマイモ供給網の紹介

刘 丹丹

登壇したのは、唐芋ワークショップのスピーカーとしては前例のない若い女性。可愛いポニーテールの黒髪を揺らしながら、いきなり中国語の歌を独唱で披露した。歌ったのはテレサ・テンの「時の流れに身をまかせ」で、国境を越えて愛唱されたヒット曲への共通の思いをかき立てるような雰囲気であった。

彼女は29歳。幼いころから農業が大好きで、20歳の時にサツマイモ販売を始め、4年後には中国語で「農業大好きな小娘」を意味するブランドを創設して起業した。産地と香り、甘さ、粘りなどの味の評価をもとに等級をつけて選別し、ブランド名の商品袋に数個ずつ入れ、説明文をつけて店頭に並べる。

ブランドへの信頼が次第に高まり、市価の5倍前後の価格にもかかわらず現在は全国100か所あまりの食品スーパーで販売されており、年間売上高は100万円を超えているという。

〔Ⅳ〕読谷村からの呼びかけ

「紅イモの村」であり「日本で最も人口の多い村」の第19代村長、石嶺傳實氏は、日本におけるサツマイモ栽培が沖縄に端を発した史実を踏まえて、「甘藷伝来の歴史、スイートポテロードを巡る旅の集大成として読谷村の紹介をさせていただく」と述べ、太平洋戦争での沖縄島民の悲惨な体験から語り始めた。

読谷村はサンフランシスコ講和条約発効の1952年当時、村の7割の土地を米軍基地に占められていた。その後の基地返還交渉を経て、2006年からは村の36%に縮小され、返還地の多くはイモ栽培をはじめ農業用としての基盤整備に取り組んでおり、「現在、私たちの村は戦後復興の真ただ中にいる」という。

その目指す目標として「知産地笑」という造語を紹介した。その意味するところは「知恵を出し合い、商品を産み、地元が盛り上がり、笑顔があふれる」村づくりである。その具体例として、紅イモをはじめ多彩な農産物を原料とした加工食品の製造販売の現状を紹介し、「日本における六次産

業化のモデルを、ぜひ来年読谷村に来て直接見ていただきたい」と、第10回記念ワークショップへの参加を呼びかけた。

〔Ⅴ〕現地見学

2日目は参加者約100人がバス2台に分乗し、サツマイモ栽培・加工の現場見学を行った。

最初に訪れたのは、主催者の王立国氏が社長を務める「天津豊華裕隆農業發展株式会社」で、5千畝の試験栽培団地を有し、その中に技術研究試験室、保管貯蔵庫、毒素除去苗の生育基地などの施設を整えて、新品種の導入、毒素除去、模範栽培から産品のオンライン販売までを一体化した企業である。敷地の入口そばで社員が何品種もの焼芋を用意して提供し、品種ごとの味の違いなどを説明した。同社は4年前に設立され、すでに1畝30トンの販売用イモを収穫し、全国各地の焼芋店に供給しているという。

続いて、天津、北京の加工食品企業で作業現場を見学した。北京市の工場では市の農政局長を務める女性が説明役に加わり、農業振興政策の一環として、若い世代が農業関連の仕事に魅力を感じて取り組めるように、教育現場や進路指導への配慮を行っている、と行政の取り組みを語った。そして、同席していた大学卒の若い女性がサツマイモの加工商品作りについて、自らの成果について語った。

(写真撮影：郷原 岳東)



郷原会長と読谷村の石嶺村長